

聞名仏教

第111号
(発行日)

2019年12月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉8月は休み
毎月12日午後3時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月6日午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月18日午後6時30分始

私はどこにいるのか

仏教では真理に迷っている人を凡夫といい、悟った方を仏といいます。

迷っているということとは、本当の幸せとは何かが分からず、その幸せに至る道が分からず、生きていく意味が分からず、自分とは何ものかが分からない。更に言えば自分がどこに居るかという立ち位置が分からずに生きていく人のことです。しかも悲しいことに自分が迷っていることも分からない。そういう姿を迷いの凡夫といいます。

ところで「迷う」ということで身にしみて感じることは「自分が今どこに居るか」という問題です。

これについて以前中国に、ツアーでなく自由な旅をした時にこんなことがありました。

関空を出発し上海の浦東

国際空港に到着。時速三〇〇キロ以上で走るリニアカーに乗って、一〇分余りで上海の街に入る。地下鉄に乗り、有名な〈外灘〉近くの駅に降りて、地上に上がって街をあちこち歩き回る。ところが初めての所だから迷ってしまい、元の地下鉄の駅に帰ろうとするのですが見当がつかず困ってしまいました。

日本語表記の上海の地図を広げるのですが、ここで一番問題になるのがうろろろしている私自身が「私は今この地図上のどこに居るか」という問題です。このことを尋ねようと思っただけなのに、近くにいる中国人に身振り手振りで「この地図上のどこに私は今居るのですか」と尋ねるのですが、なかなか質問の意図が相手に通じないのです。というのは相手の中国人にとって、目の前のこの人が「自分がどこ

にいるか」を尋ねているとは案外察して貰えないのです。現地の人にとっては余りにも当たり前のことだからです。何とか質問の意味が分かってもらって「あなたはここに居るのですよ」と地図上の一点を教えられて、やっと自分の立ち位置が分かり、元に帰ることができたのです。

見知らぬ土地を気ままにぶらぶら旅する場合、「今私はどこに居るのか」ということを知っておくということは非常に大事です。それが分からないと行きも帰りもならない羽目におちいります。

このことは日々を生きる人生全体についてもいえる

ことです。人生も毎日が初めて経験する旅のようなものです。未来に何が起こるか全く不透明な旅を一日一日と送っています。それゆえ「私は何のために生きていくのか」「私は結局いつたいどこへ行くのだろうか」というとまどいや不安がつきまといまいます。

その場合、一番大事なことは「私は今どこに居るのか」という現在の立っている場所を知ることです。

これの答えが「自宅にいる」とか「西宮市の甲子園球場の近くにいる」とかというような地理的な場所を知っていても全然答えにはなりません。

それは、全人生が今この一点におさまっている「今この私の立っている場所」はどういう場所である

《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日(日) 午後二時始

講師 山口県防府市

宮田秀成先生

*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

のか。それが明らかになることこそ救いであり、全人生の依る処と方向が明らかになる極めて大事な一点と云っていいでしょう。

その答を端的に言えば、「今私はアミダ仏のあたたかいのちにおさめ取られている、そういう場所に念々離れがたく置かれているのだ」ということです。

この有難い場所はいつでもどこでも、たとえ死の淵に於いても私に離れないのです。しかも、そのことは私たちがいろいろと考えたり探したりする前に、有難いことに私たちに無償で念々与えられているのです。

それを私に知らせて下さるみ言葉が南無阿弥陀仏であります。

南無阿弥陀仏と称え聞くことは、アミダ仏が「我汝をだいている、汝を離さない、汝を浄土に連れて行く」との仰せを聞くことです。もう一つ言えばそれは「引き受ける」「助ける」の仰せであり、この仰せによつて私は今ここ、アミダ仏のいのちに抱き取られて

いることを知らされるのです。

そして、今この私を生かして下さっているアミダ仏のいのちが、死して帰らせていただく浄土でもあります。

この立ち位置を知らないのと、たとえアミダ仏のいのちの中にいても、アミダ仏のお徳は活性化してきませんから、アミダ仏はその人にとつて無きも同然です。闇の中にひとり漂っているようなものです。

それゆえお念仏を称え聞いて、アミダ仏の喚び声を聞くことが大変大事なことになるのです。

(了)

〈遠方法話予定〉

○十二月五日から六日。五日午前十時より、六日午後まで。相生市。本願寺派法林寺。

○十二月十四日。福井別院。推進員研修会。午前十時。法話・座談。○十二月十五日。姫路市。西源寺。午前・午後

○二〇二〇年二月十三日。名古屋。高畑会館。午前十時。法話・座談。(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

一代諸教の信よりも

(和讃問答)

一代諸教の信よりも

弘願の信樂なおかたし難中之難とときたまい無過此難とのべたまう

(浄土和讃)

○現代語訳(弘願である弥陀の十八願を信じること、それ以外の釈尊が一代に説かれたもろもろの教法を信じてより難しい。この難しさはこれ以上無いほどの難しさである)

* * *

N 「一代諸教の信とは？」

D 「弥陀の本願の救済法、それ以外の釈尊が一代に説かれたいろいろな教説への信心のことです」

N 「たとえば？」

D 「そうですね。四聖諦の教えのように、迷える人にとつて(生きることは苦である)こと、これを苦諦といひます。そしてそれな

によつてさまざまな想念を起す作用とか、

かと言え(迷える人は自己中心的な過度な欲求(渴愛)を起しそれを満たさうとするから)であるという集諦。そしてその渴愛を滅ぼした安らかな境地こそが本當の幸せな境界であるという滅諦。その滅諦を實現するための道を八聖道として説いたのが道諦といわれていますが、この教えを聞いて、本當にそうだと信じていることはそれほど難しいことではありません」

N 「他にはどんな教えがありますか？」

D 「例えば、先にもうしたような自己中心的な考えが起るの(我あり)が(我が物)と執着する見解から起るのですが、(我)と(我が物)と云っているよ(我)というものは本来無いものであつて、我といつてもそれは色蘊という物質的な要素と受蘊という外からの刺戟を感受する精神作用と、想蘊というそれ

また行蘊という意思作用、そして識蘊という是非善悪を分別する作用、こうした五つ要素が仮に集まった(五蘊)を(我)として掴んでいるにすぎないのであつて、実体的な我というようなものはどこにも無い、無我であるという五蘊無我説。こういう説法を聞いて信じていること、それはそれほど難しいことではありません」

N 「そこで四聖諦や無我説などの諸教の教えを信じてより(弘願の信樂)はもつと難しいといわれるのです。では弘願の信樂とは？」

D 「弘願とは『佛説無量寿経』に説かれた第十八願の念仏往生の願のことで、これを信じている信心のことを弘願の信樂といひます」

N 「念仏往生の願を信じていることは難しい、それを(難中之難とときたま)無過此難とのべたまう」とい

れますが、これはどういう意味ですか」

D 「難中之難、無過之難」とは（難の中の難、これに過ぎたるは無し）ということとで、この言葉の本は『佛説無量寿経』の終わりの部分に

この経を聞きて信樂受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなしと釈尊が説かれています。そこを典拠としてこのご和讃が作られたのです」

N 「へこの経を聞きて」というのは」

D 「この佛説無量寿経の教説を聞いてということです。この経にとかれた弥陀の本願、その中心は第十八願の念仏往生の願ですから、この本願を信じることは極めて難しいと釈尊ご自身がお説きになっているのです」

N 「なぜ一代諸教の教えを信じるよりも念仏往生の願を信じることは難しいのですか」

D 「念仏往生の願は乃至十念・若不生者・不取正覚（十念に至るに及ぶまで、若し生まれずば正覚

を取らじ）

で、我が名を十声一声称えるばかりで浄土に生まれしめる、まるまる助けるという不可思議なアミダのお誓いです。これを信じることは極めて難しいのです」

N 「我が名を十声一声称えるばかりで浄土に生まれしめる」は、ただ口でナムアミダブツと称えるばかりで仏にする、との誓いでしたら、このままナムアミダブツと称えたら浄土に生まれさせてくださるのですから、難しいとは思えません。ナンマンダブツナンマンダブツこれでいいのですね」

D 「ええ、形としてはそれでいいのですが、あなたはそれで満足できますか。あるいは本当にそれを信じていると思えますか」

N 「信じていると思えますが」

D 「あなたは念仏往生の願を信じたと思っても、例えれば偉い仏教の学者がきて（そんな口先で念仏称えたぐらいで助かるなどと言うことは本当はあり得ない。それはあなたを念仏に入れしめるための仮の方便に過

ぎないのだ」といわれたら、どうですか。ぐらつきませんか。もしぐらつくなら信じたとは言えないのです。だれがどういおうとこの南無阿弥陀仏で往生させてくださると信じ切っているのが真実の信心です。どうですか」

N 「そうですね、すぐぐらつきますね」

D 「ええ、だから信じてはいないので。唯称えるばかりで助けるといふ不思議な本願を信受することは難しいのです」

N 「難しいのならだれも救われませんか」

D 「実はこの難しいという意味は、易しいとか難しいとかという難しいではないのです。凡夫には信じるのが不可能だという意味の難しいです」

N 「ではだれも信じることはできないのですね」

D 「その言葉を他者への言葉とせず、あなた自身の言葉と聞いて下さい」

N 「ということは、私には念仏往生の願を信じることは不可能ということなのですね」

D 「ええそうです。どれだけあなたが聞こうが考えようが信じようと努力しても、あなたは信じることは不可能なのだ、との仏語です」

N 「そうすると、念仏往生の願を信じるのができない私は助かりませんね」

D 「ええ、助からないのです」

N 「ではどうしたらいいのですか」

D 「どうしたらいいか、外に道があれば別の道を探して下さい」

N 「とても外の道はできそうもありませんし、ついていけそうもありません。私はお念仏でしか道が無いと思つて念仏往生の願の前に立っているのですから」

D 「念仏往生の願に最後の救いがあるとなつて、その念仏往生の願を前にして、今度はそれを信じるのができない、という壁にあなたは直面しているのではな

いのですか」

N 「ええそうです」

D 「ですから、最後の念仏往生の願を信じるのができないあなたは、全く救い

なき者ではありませんか」

N 「ええ、私は最後の綱である念仏往生の願にすら手が及ばない、信じるのができない人間です」

D 「ええそうです。それがあなたの本性です。それがあなたの現実です。それがあなたの偽らざる姿です」

N 「念仏往生の願に対して、私はもはや本願すら信じるのでできない身であり、助からない者だと知らされます。このまま落ちていかねばならない存在なのですね」

D 「そうなのです、あなたは助からない、落ちていかねばならない存在なのです」

N 「・・・」

D 「けれども、そんな助からない私に今一度念仏往生の願を聞いてみて下さい。念仏往生の願はどう仰せられていますか」

N 「我が名を称えるばかりで助ける、その外になにもいらない」です」

D 「ええ、アミダ仏はそんな私たちに、へ本願を信じることもできない助からない汝をこそまるまる引き受

「松並松五郎念佛語録」より

ける、汝はただ口にナムアミダブツと称えるばかりでよい」と仰せられているのです。ここをよくよく聞くことです

N 「へ我が名を称えよ」の一句にはそれほど驚くべき大悲の救いの言葉なのですね」

D 「ええそうです」

N 「そうするとへ難中之難、無過之難」といってお言葉は、私の能力の限界を示して下さり、どこまでも助かりよりのない私のありのままの姿を示して下さい、有り難いお言葉なのですね」

D 「ええそうです。そのように救われがたき身に念仏往生の願はへ極重の悪人なる汝よ、ただ仏の名を称えるばかりで助ける、その外に何もいらぬ」との無窮の大悲をかけてくださっているのです」

N 「まったく逃げるものでもどこどこまでも追いかけて、まるまる引き受けて下さる大悲大悲の極まりのないお心です」

D 「そうです」

N 「お慈悲にもう降参です」

(了)

○仏法とは、どんなことかと思うたが、この口仏様に借してやるだけであった。言いかえたら、この口はお阿弥陀様の口なれば、身も心も、お阿弥陀様のもの。この口借して上げるのでない。その口借してくれよと頼んでござる。身口意の三業は皆仏様のものなれど、私等は自分のものと思っているから、借してくれよと頼んでござる。

(松並松五郎)

* * *

松並さんはここで「身も心も、お阿弥陀様のもの」とサラッとおっしゃっているが、これはよほど深い信心からでないとは到底いうことはできない。

迷いとは、身も心、いわば「いのち」を自分のものあるいは自分自身と生きて生きていくことにほかならない。いのちを我が物と執着している、それが端的に迷いというものである。

しかし本当はいのちは我が物では無くて、元々はかりな

い(アミダ)のいのちのものである。それを我が物、私そのものと執着し私有化している「我がいのち」をアミダに帰すのが宗教の救いといってもいい。

アミダとは光明無量の徳であるが、その働きは寿命無量に於て成り立っているのである。その寿命無量のアミダに我がいのちを帰す、あるいは帰る、それが宗教の根本命題であるといつていい。

一遍上人が

「仏とは ころと身とのあるじなれ 我が我ならぬ心振る舞い」

と詠っているが、心と身との主人がアミダ仏であるといっている。

では宗祖親鸞聖人は、どうかといえば、アミダのいのちが主であることを知った上で、なおこの世の生き方は、「いのちは我と我が物」という意識(煩惱)を離れることができないという悲しみをつねにもつておられたお方だと伺う。それが親鸞聖人の自己凝視のお姿であり、そういう聖人なればこそ私たちもついていけるのである。

そこで、松並さんも「我等は身もころも自分のものと思っている」という、その我等の一人であるご自分を見ておられるのである。

そして「仏法とは、この口、仏様に借(貸)かしてやるだけ」であると思いついたことを言われるのである。

アミダ仏からいえば、アミダ仏ご自身のいのちである個々のいのちにお念仏を行じておられるのであるが、私たち拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。はこのいのちを「我が物」であると思っているから、アミダ仏は「汝の口を借してくれよ」と私に頭を下げてたのんでおられる、そのアミダ仏が私の上に出て下さるのである。

それが口に現れたもうお念仏である。こうして南無阿弥陀仏と口に現れ、耳に聞かされる、「汝を助ける、引き受ける」と私に直接に、身近に仰せ下さるのである。ここにアミダの大悲が現行している。「仏法はこの口阿弥陀様にかしてやるだけ」とは大胆であるが、なんとアミダ仏と親しくなっておられることかと感嘆せざるを得ない。

(了)

【住職雑感】

この十月の下旬、長年親しく尊敬してきた同朋のT師が逝去された。病床にお見舞いに行く。病床で苦痛に耐えておられるのを見るのは辛かった。自分の受けねばならない苦を代わって受けて下さっているように申しわけない思いが湧いてくる。苦痛もいろいろあるようで、痛いと言ふより体が重くて重くて苦しいとのことであった。お念仏の救いを少し書いて師に渡すと、それを喜んでくださった。苦しみはしかし耐えていけるもの、否耐えざるをえないものであるが、一ヶ月ほど耐えられてこの世を終えて逝かれた。同法の友を失うことの悲しみをしみじみと感じるこの頃である。

【念佛寺発行書籍】

- (一) 『木村無相・お念仏の便り』
- (二) 『松並松五郎念佛語録』
- (三) 『真宗の念仏と信心』
- (四) 『真宗教学の諸問題』
- (五) 『佛に会うまで』
- (六) 『佐々木蓮磨・法味寸言』